

## 肌色の色鉛筆

中 二

長い休校期間、絵を描くことにはまった。

好きな漫画の描きたいページを開いて、鉛筆で模写をし続けた。幸い、時間はたくさんあった。

自分で言うのも気恥ずかしいが、画力は休校前のそれとは比べものにならないくらい向上していた。

線画がある程度納得いくようになり、色を塗ってみようと思った。家にあつた水性ペンで塗ってみた。けれども、思ったように塗ることができなかった。

私がそのときに描けるようになりたかつたのは、瞳だ。私は、家族の目を観察してみた。

父、母、姉、姉、暗い茶色、明るい茶色、黒に近い深い茶色、三人とも瞳の色が違った。鏡に映した私の瞳も、誰とも一緒ではなかった。

そして、光の当たり方によって影もでき、様々な色が見えて、家の水性ペンでは表現することが非常に難しかった。

次に習得しようとしたのは、髪の毛の塗り方で

ある。休校中であるため、観察対象はまた家族だ。調査の結果、四人とも髪の毛の色が違った。髪の毛の太さや、天然パーマのうねり具合も違った。姉と私は、姉妹なのに真逆と言ってもよいほどだった。瞳や髪だけではない。顔の色も全員が違っていた。光と影による色の違いもある。

私の目に見えているように絵を描くためには、たくさん色を使わなくてはならないことに気付いた。十二色のクレヨンで、目や髪や顔をそれぞれ一色で塗っていた頃の自分から成長したと思つた。

上手くなりたくて、インターネットで肌の塗り方を検索し、真似して塗ってみた。イエローベイス、ブルーベイス他、様々な肌の色味があることを知った。一ページに二人以上を描くときには、顔の塗り方も変えるようにした。

休校期間が終わった。中学の教室には、初めて会う人もたくさんいた。大勢いても、マスクに隠れて分かりにくくても、肌の色は一人一人違うように感じた。

ある日、「肌色」と表示された服が店頭から回収されたというニュースを見て親が言った。

「今だったらベージュだね。でも、あなたが小さいときに買ったクレヨン、『うすだいたい』は、ママが子供の頃には『はだいろ』って書いてあったんだよ。」

「服が回収されたり、クレヨンの色の名前が変わったり、これって人種差別に関係しているの？」

私は、驚いて思わずいつもより大きな声が出た。私は、絵を描く過程で、肌の色が全員違うことを知った。日本にもいろいろな国の人が暮らしているし、多様性を尊重する時代なのに、なぜこのように服が回収されることが起こるのだろうか。

私は、「はだいろ」が「うすだいたい」に変わった経緯を調べてみた。すると、消費者が声をあげ、企業を変えたということが分かった。

また、調べていく中で、プロ野球選手のオコエ瑠偉さんの妹、桃仁花さんが「親の顔を描くのが一番辛かった」と肌の色の鉛筆についてツイートしていたことを知った。

驚きとショックが入り混じったような感情が湧いてきた。保育園の頃の私は、いつも迷わず、うすだいたいの色で顔を塗っていた。私が生きてき

た中で、「顔を塗るのはうすだいたい」という固定観念ができていたからだ。私の中の常識がひっくり返されたような気持ちになった。

顔を一色で塗る小さい子供たちのために、様々な肌の色を表現できるペンがあればいいのではないかと思った。肌を塗る色の種類が増えれば、固定観念がでさずに、悲しい思いをする子がいなくなるのではないかと考えた。そのようなペンがないかと検索していくと、ドイツやイタリアでは、十二種類の肌色だけの色鉛筆が販売されており、日本にも輸入されていることが分かった。

私は、この色鉛筆が全国の保育園や幼稚園などに導入されればいいと思う。洋服等を塗るときには自分の色鉛筆を使い、顔を塗るときには園の共用の十二種類の肌色鉛筆を使うのである。

そうすれば、子供たちは、思い思いに色を選んで家族の顔を塗るだろう。私の頭の中には、保育園、幼稚園、こども園等の教室の壁に貼ってある様々な肌の色の家族の絵と、その前にいる誇らしげな子供たちの表情が浮かぶ。

小さいうちから、肌の色は家族でも同じではないと気付き、塗り分けるのが当たり前前の風潮にな

れば、多様性を認め合う心を育てることにつながっていくと思う。

私は、一人一人の個性を受け入れられる人がたくさんいる世の中になって欲しいと心から願っている。